

日露関係と北方領土問題

馬 淵 睦 夫

元駐ウクライナ兼モルドバ大使

きょう話に入る前に二つお断りしておく必要があります。一つは、皆さんが今まで何となく抱いておられるロシアに対するイメージ、日露関係や国際関係全般に関するご意見なりを、一旦白紙にさせていただきたいと思います。

なぜ、そうする必要があるかといいますと、実はわれわれは知らないうちに洗脳されているからなのです。それは今まで私たちは一方的に情報の受け手だったわけですから、それをチェックする手段がなかったわけです。もちろん私の情報も一つの見方にすぎませんから、頭から信じていただく必要はないのですが、私がこれから全く皆さんが考えてこれなかったことを申し上げる可能性があります。従って、あらかじめそれをお断りしておくということです。

しかし、洗脳云々は私が勝手に言っておるわけじゃないのです。今から100年前のことですが、アメリカにエドワード・バーネイズという人がいました。この人の名は聞かれたことがあるかもしれませんし、私の『国難の正体』の中にも書いてありますが、この人は『プロパガンダ』という本を書いて、その中でこういうふうに言っているのです。世の中の一般大衆、というのは私たちのことなんですが、どのような習慣を持ち、どのような意見を持つべきかといった事柄を相手に、というのは私たちのことですね、相手にそれと意識されずに知性的にコントロールすることは民主主義を前提とする社会、アメリカもそうですし日本もそうですね、においては非常に重要だと言っているのです。

この仕組みを大衆、これも私たちのことなのですが、大衆の目に見えない形でコントロールできる人々こそが目に見えない統治機構を構成し、アメリカの真の支配者として君臨していると言っているのですよ。皆さんはアメリカの支配者って大統領だと思っておられますよね。それは100パーセント間違いではないのですが、しかし大統領だけではない。つまり大統領を操っている人がいるということを、エドワード・バーネイズさんは言っているのです。この『プロパガンダ』という本は日本語にも訳されています。

ところが彼が単なる一般の人なら私もそんなに注目はない。しかし彼は100年前にアメリカのウィルソン大統領の側近だった人なのです。その側近だった人がはっきりウィルソン大統領はアメリカの真の支配者じゃないと言っているわけですよ。皆さん、こういうことは残念ながら学校では教えてくれないのです。ウィルソン大統領は理想主義の大統領だ、そういうふう習う

わけですね。ところがウィルソン大統領の取り巻きの人がそうじゃないと言っているのですが、この点は教えられていないのです。なぜかお分かりですね。私たちの意見をコントロールし、目に見えない統治機構を構成している人がメディアを握っているからなのです。そのことを彼は公表しているわけです。

しかし、この情報の受け手の私たちがその意味に気付いてないし、日本のメディアも一切伝えないのです。要するに、メディアの言ってることはフェイクニュースだということになります。メディアの本家のアメリカがそう言っているのです。ちょっとそういうことを頭に入れて考えてみますと、今、地上波でも、それから新聞でもいろんな所で報道されているニュース番組に対して、少し距離を置いて見ることができるのではないかなという気がいたします。これが第1点の頭を白紙に戻していただきたいと申し上げた理由です。

それから第2点は、一応レジュメを配布しておりますが、今まで講演の常としてレジュメどおりにはなかなか話が進みません。話がどんどん飛ぶ可能性があります、しかしそれは決して私が勝手に脱線させているのではなく、皆さんの気持ちに従って話しているのです。皆さんの思いが、目に見えないですけど、何となく伝わってくるのです。それに従って話を組み立てているわけです。

ですから、もし私の話がつまらないということになれば、それは皆さんの責任で、私の責任ではない。もし何か得るものがあつたらそれは皆さんの功績ということになるわけです。こういう話をすると半分、冗談だと。半分というか全く冗談だろうと思われるのですが、実はそうでないんです。そういう教育は戦後やってこなかった。戦後の教育というのは唯物論の教育ですから。目に見えるものの教育しかやってこなかった。しかし、いじめの横行や学級崩壊に見られるように、唯物論教育が今、行き詰まっているわけです。

ですから、きょうお集まりのかたがたも何か勉強しようという、そういうモチベーション、意欲がある方だと思います。それは何か今の皆さんがたが、シニアの方が多のですが、今まで勉強してこられたことに何か物足りないものを感じておられるのではないかと思います。やっぱり唯物論的な見方だけでは、この世の中は分からないということなのです。というか、むしろほとんどのことは唯物論では分からないのです。

例えば、世界全体のほんの一部分しかいわゆる知性では理解できないのです。つまり唯物的に物事を考えて分かる所は世界のほんの一部だと言うことです。では、残りの世界は何で分かるかという、感性なのです。私自身の経験からもそう思いますし、皆さんがたも何となく感じられることがあるのじゃないでしょうか。目に見えるものだけ考えていれば、世界のほんの一部しか分からない。だからこの世界をバランスよく理解するにはどうしても感性というものが必要になってくるということなのです。

感性と日露関係がどういう関係にあるのかと疑問を持たれるかもしれませんが、実は関係があるんです。昨日、平昌オリンピックで女子のフィギュアスケートのフリーがありました。そこで

ロシアの2人の選手が熾烈な戦いをしてザギトワさんが優勝しましたね。2位のメドベージェワさんも含めて2人とも日本が大好きなのです。これはどうしてでしょうか。日本のアニメが好きなのだけじゃないのですね。私は今から40年前、ソ連時代にモスクワに勤務しましたが、そのときにこの2人のフィギュアスケート選手が示したような行動や発言は、とても当時は想像できなかった。東京オリンピックのとき日本とソ連は女子バレーで死闘を演じたわけですが、あのときのロシア選手の表情を見れば、誰も笑っていませんでした。みんな怖い顔でした。それが1979年にモスクワに勤務したときのソ連社会の様子だったのです。街を歩いていても誰も笑ってない。みんなうつむき加減に歩いているのです。明るく笑っている人を私は見たことない。それが共産主義社会の実情だったのです。

でも、われわれは学校で何と教えられたか。もうすぐにでも世界は共産主義の世の中になると教えられたのです。私たち学生に向かって、一流企業に就職したり、国家公務員になったりしたら、革命裁判によって君たちは有罪になる。こんな風に大学の先生が学生を脅かしていたのです。当時は東西冷戦の最中です。多くのマルキストの先生がたはもうすぐ自分たちの世が来るとっておられたのです、間違っています。だから、このような無責任な授業を行っていたのです。

ところがどうなりました。1991年に共産主義国ソ連は完全に崩壊したわけですね。ところが間違っていた授業をした責任取った人、聞いたことがない。学生に謝った先生聞いたことないですよ。皆さんの世代は学校で洗脳されていたのです。明日は共産主義の世の中だと。私の学生時代はベトナム戦争の時代ですから、反ベトナム戦争の学生運動が盛んだったのです。授業に行ったら学生の運動家が来て、きょうはスト権の投票やりますとか。授業をボイコットしましょうとか、そういう時代だったのです。ところが、じゃあベトナム戦争って何だったか誰も教えてくれません。これは後でお話しするチャンスがあるかと思いますが。

私がブレジネフ時代のソ連に勤務してびっくりしたのは、このソ連がアメリカと並ぶ超大国であると、とても思えなかったのです。私は公務員宿舎に入っていたのですが、ソ連への赴任に当たって汚した箇所などを修理していかなければならなかったのです。そこで工務店の人に入ってもらって直しました。その工務店の人がわれわれがソ連に赴任するということを知って、いやあ、ソ連の方って面白い人ですねって言うわけですよ。どういうことですかと尋ねたら、ソ連の大使館員が本国に帰るときに、ドアの鍵一式を大量に買い込んで行きましたよ。あんなもの何に使うのですかねと話してくれました。私は答えようがなかったのですが、モスクワに行ってみると分かりました。

ソ連では鍵が生産できないのです。信じられないでしょう。あのアメリカと並ぶ超大国のソ連で、ドアにつける鍵が生産できない。私のアパートの鍵も外国製でした、その鍵は誰かがこじ開けようとした跡があったので、全部スウェーデン製の鍵に取り換えましたけれど。ところが、新品の鍵がすぐ調子悪くなるのですよ。それはわれわれがいないときに当局の関係者が侵入しようと来るわけですね。私たち外国人はそういう所にいわば監視付きで住んでいたのです。私のアパー

トの住民はみんな外国人でした。アパートの入り口に、民警が常駐していて、出入りする者をチェックしていました。

つまりソ連は警察国家であったのです。私は赴任当時彼らの集中監視下にありました。私の行動パターンを徹底的にチェックする。朝大使館に出勤するために、8時半に家を出る。そうすると予定どおりちゃんと20分ぐらいで大使館に着いたかどうか。大使館の入り口に民警がいますから、チェックしているわけです。夜6時に大使館を出た。そうするとすぐ電話する。今、出た。それでアパートに戻りますと、民警が今着いたと電話している。こういう監視を一か月くらい続けて、私の行動パターンを把握するわけです。

赴任後暫くしてアパートに電話がかかってきました。普通われわれ大使館仲間同士で電話することはあっても、ロシア人から電話が来ることはまずないんです。なんときれいな英語をしゃべる女性からでした。私はロシア語の専門家じゃなかったのですが、そのことは知っていて、英語で私はあなたの前任者の知り合いでしたと。だから今度はあなたともお付き合いをしたい、今近くのバーにいますがお会いできませんかと。

皆さん、すぐお気付きになりますね。そんな幼稚なハニートラップなんてかかるはずがない。絶対に女性に近づいては駄目だと釘を刺されていましたが、こっちが近づくことはなくても、向こうから近づいてきますからね。彼女は1週間ぐらい毎日、ご苦労にも毎夜、電話してきたのですが、私が全く相手にしないので終わりにになりました。

あるとき東京からVIPが来られまして、モスクワで唯一、当時、外国人が行けるバンド付きのレストランへお連れしました。その前には一応釘を刺しておいたのですが、その方はモスクワの殺風景な雰囲気気がめいっておられたのだと思います。私たちの相手をしてくれた女性を大変気に入られたのです。その店では客の女性、と言っても当局の回しものですが、話し相手になってくれたり、ダンスを踊ってくれたりするのです。彼の相手の彼女がダンスをしながら彼の耳元で私のアパートにいらっしゃいませんかと囁いたというわけです。彼はかなり乗り気でしたが、諦めてもらいました。彼は、東京に帰る前の日だったら大丈夫じゃないかななどと未練たっぷりでしたが、たとえ今回は逃げ通せたとしても、東京で追っかけられますよと説得して諦めてもらったのですが。

何が言いたかったかという、そういう警察国家、監視国家がソ連だったのです。ところが残念なことに、いまだにわが国のロシア観というのはソ連の時代のソ連観を引きずっているのです。ですから、日本のメディアは、みんなプーチンは信用できないと言っているのです。プーチンにだまされるなど。当時のソ連の専門家として活躍された保守系の論客の方々もほぼ例外なくソ連時代のロシア観を引きずっておられます。

以上は序章で、これから本題に入ります。マッキンダーの地政学の教えるロシアの戦略的地位についてお話ししますが、ロシアというのはどういう国か。世界地図で見た場合にロシアというのはどういう位置にいるのかということを理解していただければと思ってマッキンダーに触れる

ことにしました。

マッキンダーの名言として今に伝わっていますが、「東欧を支配する者がハートランド、ハートランドの中心はロシアなのですが、を制し、ハートランドつまりロシアを支配する者がユーラシア大陸を制し、ユーラシア大陸を支配する者が世界を制する」、こういう定理というか格言といえますか、名言を残したのです。さて、ここで重要なのは、ロシアが世界を支配するとは言っていないのです。ロシアを支配した者が世界をゆくゆくは制することになると言っているのです。ひっくり返しますと、今もそうなのですが。今の世界情勢の枠組みは何かと言うと、ロシア支配を巡る戦いなのです。

そうするとプーチン大統領は外国勢力、あえて私は国家と言わずに勢力と言いますが、その理由は後でお話します。外国勢力にロシアを支配されないように奮闘しているのがプーチン大統領なのです。日本の新聞と真逆なのです。それではなぜ日本の新聞は真逆の報道をするかという、アメリカの報道をまねしているからです。アメリカのメディアを握っている人がプーチンを追い落とそうとしているのです。こういう構図なのです。これはメディアの報道を見ていたのでは分からないのです。プーチンは独裁者だとか民主化運動を弾圧していると報道していますが、それは全部うそだとは言いませんけれど、ほどほどに聞く必要があるわけです。今、世界のメディア、ということは世界を支配している勢力と言ってもいいのですが、そういう人たちはプーチンを引きずり下ろそうと狙っているのです。だからわれわれの頭もそれで洗脳されてしまっている。プーチンは怖い人だ。ロシアは信用できない。ロシアが北方領土を返すはずがない。われわれは知らず知らずのうちにそういうふう洗脳されているのです。

しかし、マッキンダーの100年前の格言からすると、ロシアを支配する者が究極的に世界を支配することになるのです。ですから今、世界で行われていることは、誰がロシアを支配するかの戦いなのです。こういうことは新聞を読んでも、大学の先生の話聞いても分からないのです。それはメディアを握っている人と、学界を握っている人が同じ勢力だからです。日本の学会も例外ではないという気はしております。

それはともかくとして、問題はプーチンをどうしても悪者にするための口実が、この間のウクライナ危機なのです。私はウクライナに勤務した経験がありますので、この間のウクライナ危機の真相はすぐ分かりました。私がウクライナに大使として赴任した2005年の前年にオレンジ革命というのが起こったのです。あれは民主革命だとわれわれは教えられましたね。違うのです。実は東欧のカラー革命といわれている一連の革命が2003年にグルジア、今ジョージアというらしいのですが、グルジアで起こりました。その次がオレンジ革命だったんです。

ところが、このオレンジ革命を裏から指導したのは誰かという、皆さんもご存じの国際投資家のジョージ・ソロスなのです。そもそもジョージ・ソロスはソ連邦が崩壊して15の共和国に分かれたときに、ロシアも含めて各々の社会を民主化、市場化するためのオープンソサエティーという財団をつくって、それでバラ革命を起こしたサアカシュヴィリのような運動家を育成してき

たのです。そういう人たちが東欧で次々に革命を起こしていったのです。なぜ革命を起こしたか、お分かりですね。マッキンダーの定理が言う「東欧を支配するものがロシアを制する」に従って、ロシアを追い詰めるにはロシア周辺諸国を含む東欧を自分たちの味方にしなければならないという戦略に拠っているわけです。

そのために、まさにグルジアから始めてウクライナ。その次がキルギス。つまりロシアの周辺諸国をどんどん彼らがいう民主化していったのです。バラ革命、オレンジ革命、チューリップ革命、これらを総称してカラー革命と言うのです。

今のウクライナ情勢なりロシアを理解する上でちょっと説明しておきますと、当時のオレンジ革命とは何だったかという、それから10年後に追放されたのがヤヌコビッチ大統領ですが、ヤヌコビッチとその10年前に2004年にユシチェンコという、最終的には彼が大統領に当選するのですが、この2人間の大統領決選投票だったのです。それでヤヌコビッチが勝ったのです。ウクライナの選挙管理委員会の発表では。それに対して選挙は不正だと騒いだのがオレンジ革命なのです。誰が騒いだか分かりますね。アメリカが騒いだのです、NGOを使って。もちろんジョージ・ソロスもいたわけですが。それで、もう一度、選挙をやり直して僅差でユシチェンコが勝ったわけ。恐らく皆さんお分かりですね。ユシチェンコが勝つまでずっと選挙は続いたと思いますよ。

つまり、われわれは選挙というのは神聖なものだと思いますけれど、そうじゃない選挙があるのです。だからグルジアも不正選挙ということを騒いで当時のシェワルナゼ大統領をつぶしたんです。ウクライナもそうです。勝っていた大統領を不正だ不正だとデモで騒いで追放したんです。でもこういうことを言うとメディアも大学の先生も困るわけ。あれは民主化運動だと学生に講義しておられましたから。

それはともかくとして、この間の2014年のプーチンによるクリミア半島の併合ですね。これを口実に使ってプーチンは領土拡張主義者とずっと言い続けているのです。アメリカのメディアも日本のメディアも。日本のロシア学者も。しかし実態は違うのです。私はそのときには日本に帰っていましたが、あのデモを見てどうも解せないことがあったのです。それは酷い暴力デモだったからです。懸念したとおり右翼とかネオナチがデモに加わっていたのです。民主化勢力の中に武装した過激派が参加していました。そういう過激派が仲間であるはずのデモ隊に向けて発砲して、虐殺したんです。

つまりヤヌコビッチの治安部隊が虐殺したのではない、逆なんです。ところが国際政治の舞台ではこういうことがよく行われるのです。それを専門用語で偽旗作戦というのです。ヤヌコビッチの治安部隊がデモ隊を虐殺したと言う偽の旗を掲げて、ヤヌコビッチを中傷したわけ。メディアはヤヌコビッチの治安部隊が発砲したと報じて世界の世論を反ヤヌコビッチに導いた結果、ヤヌコビッチは追放されることになったのです。要するに、ウクライナの民主化運動とはクーデターだったのです。

ところが世界のメディアや政府は、日本のメディアも政府も含めてみんなこれは民主化運動だと言っているわけです。しかし、嘘なのです。証拠も上がっている。アメリカの当時の国務省のビクトリア・ヌーランドというロシアと東欧を担当している筆頭の国務次官補ですね。その彼女と一緒にデモしていたのですよ。反大統領のデモ。今アメリカはロシアが大統領選挙に干渉したなんていろいろ難癖をつけていますが、この例で分かるようにアメリカがやってきたことは選挙干渉どころじゃないですよ。ウクライナのクーデターを唆したというか、一緒になってクーデターをやったのは当時のアメリカ政府ですね。これはトランプのアメリカではありません。これを区別しなきゃならないのですが。

デモを背後から操ったのはネオコン。つまり新保守主義者といわれる人たちです。ネオコンが支配するアメリカなのです。ビクトリア・ヌーランド女史の旦那さんはロバート・ケーガンというネオコンの理論家ですからね。だって外国の政治デモにアメリカの政府高官が一緒になってクッキーを配ってましたからね。その映像は世界に流れているのですよ。NHKも流していましたが、その意味をNHKは説明しない。それはなぜか。どうしてもプーチンを悪者にしなきゃならない。もう皆さんお分かりですね。ウクライナ危機の真の目的はプーチン降ろしなのです。

もう一つ証拠を上げますと、アメリカのパイオット駐ウクライナ大使とヌーランド国務次官補が「ヤヌコビッチの後の政権はヤツェニユクにしよう」と電話で協議していたのですが、この会話がユーチューブにすっぱ抜かれて、国務省の報道官もこの事実を認めざるを得ませんでした。さて、ヤヌコビッチが逃亡した後の暫定政権の首相にこの電話通りヤツェニユクがなりました。そのヤツェニユクは私がウクライナにいるときには外務大臣をやっていましたので、よく知っている男ですけど、ヤツェニユク首相の挑発的な反ロシア発言を聞いて私は失望しました。彼の反露姿勢が新政権のロシア政策を象徴していました。

もう証拠を二つ上げました。にもかかわらず、まだプーチンが悪いと世界のメディアは一方的に言っているのです。皆さんも、プーチンがクリミアを取ったのは悪い、プーチンは領土拡張主義者だと思っておられるでしょう。しかし、事実はそうじゃないのですね。クリミアのセヴァストポリという軍港は、2042年までロシアが条約によって租借していたのです。ところがクーデター政権はそれを破ってロシア人をセヴァストポリから追放しようとしたのです。だからプーチンが先手を打ってクリミアを併合したわけです。これは、アメリカの高名な国際政治学者もアメリカがプーチンを追い詰めた結果だと遠回しに認めています。つまりクリミア併合はプーチンにそれなりに分があるということ。けれどもそのことは世界のメディアも日本のメディアも報じないのです。

今はもっとひどいことを言っていますよ。プーチンがクリミアを武力で奪取した。しかし武力は使ってないのです。もちろん、クリミアでの住民投票のときに軍の関係者が現地に存在していたことは確かですが。プーチンも法学部出身だから、法律的手続きを重視して住民投票という形を取って、住民の意思としてロシアに併合を希望するという申し出を受けてロシアに併合をし

たということです。もちろん、住民投票はロシアの圧力の下で行われたということは可能でしょうし、そういう面が強かったと思いますが。

しかし、なぜプーチンがそういう非常手段に訴えなければならなかったかという点、ウクライナからロシア人が追い出されそうになっていたからです。例えば、オデッサに住んでいたロシア人がウクライナ新政権の支持者に虐殺された事件がありました。私の実感としては、ウクライナ人はロシア人に対して複雑な気持ちを持っているのは確かですが、ロシア人をウクライナから追い出そうと思っている人はほとんどいない。せいぜい1パーセントくらいです。ネオナチみたいな狂信的な排外主義者は、ウクライナの殆どの人々はロシアとの共存を選んでいたのである。

それは当たり前であって、経済的な環境を考えれば嫌な隣国でも共存せざるを得ない状況にある。ウクライナの全貿易量の3割はロシアですから。しかもエネルギーの8割近くはロシアから来ているのです。そういうことを考えれば、ロシアと断交してウクライナの経済が成り立つはずがないわけです。いわゆる反ロシア的な政治家の中にもロシアを排撃しようと言う人はいなかった。ロシアには強いことを言っても、ロシアと断交したりロシア人をウクライナから追い出したり、そういうことまで考えた政治家は誰一人いなかった。そういうことをメディアは伝えないから、われわれはプーチンというのはひどい人だ、怖い人だといったイメージが頭にこびり付いているわけですよ。

繰り返しますが、マッキンダーの法則からうかがえることは、ロシアが世界を支配する野望を持っているとは言っていないのです。マッキンダーはイギリス人ですから。ロシア人が言うのだったらちょっと割り引いて聞く必要がありますが、ロシアとしばしば戦火を交えたイギリスの学者ですら、ロシアが世界を支配する野望を持っているとは言っていない。ロシアが世界を支配する野望を持っていないことは、私がロシアに、当時はソ連でしたが、住んでみて分かりました。ロシア自身の一つの世界なのです。つまりロシア語で世界はミールと言うのですが、ミールというのは平和という意味でもあります。農村共同体のこともミールと言うのですが。

とにかくロシアというのは一つの世界なのです。だからロシアはこれ以上拡張する必要がないのです、論理的に考えれば。もちろん帝政時代以来、日本に対してもロシアは膨張してきましたが、それはロシアの国土を広げるのじゃない。ロシアの国境の外側、これをバッファゾーンと言いますが、そこは静かであること。あるいはそこは親露的である。少なくとも反露ではないということを目指しているのです。これがロシアの伝統的な安全保障観なのです。そういう意味で、国境を越えた地域に関心があるというのは、そのとおりなのです。でも、それはロシアの領土にしようということではありません。

ロシア人の土地への愛着というのは母なる大地と言いますね。ロシアの人はあのソ連時代でもソ連を逃げ出さなかったのです。逃げ出したのはロシア人ではない、ユダヤ系の人たちです。それはまあ本題と実は関係するのですが、ロシア人は逃げ出さなかった。それはなぜか。自分たちはロシアの大地を離れたらロシア人たり得ないというのがその理由です。これはソ連崩壊後です

が、ソルジェニーツィンがアメリカに亡命しました。でもロシアに戻ってきた。なぜかという、アメリカじゃ創作活動ができないということだったのです。私もロシアの大地に生活して分かりました。あの大地が持つ力ってこののでしょうかね。不思議な力があるのですね。ロシア人というのはロシアの国土に住む人なのです。われわれに似ているのです。われわれにも日本の国土が持つ土着力というものがあるんですね。

ですから話は飛びますが、日本では昔からいろんな人が四方八方から来たわけです。今で言えば移民ですが。でもそういう人たちは日本に来て同化したのです。同化して日本人になりました。この同化力の強さはあまり意識されていないと思いますが、日本では帰化した人も何々系日本人とはいわないのです。帰化したらみんな日本人なのです。つまり日本の持つ土着力というのは土地だけじゃなくて、われわれの文化の力でもあるんです。最近、帰化した人を本当に土着化する、日本化する力が少し昔に比べて弱まっているということはあると思いますけれど。でも、日本にいったん帰化した人はみんな日本人なのです。

アメリカ人の日本学者ドナルド・キーンさんが、もう1年以上前ですが日本の国籍を取られましたが、ドナルド・キーンさんのことをアメリカ系日本人とはいわない。参議院議員にツルネンさんというフィンランドから帰化した国会議員がおられますけれど、彼のことをフィンランド系日本人とは普通いわないのです。それが日本の特色でもあります。

何を言いたかったかという、日本の持つ、日本列島という土地が持つ土着力ですね。これがロシアの母なる大地の持つ土着力と似ているのです。そのほかにもロシア人と日本人の似ている点を上げますが、皆さん驚かれると思いますがロシア正教というのがありますね。性善説なのです。ところが、カトリックもプロテスタントも性悪説、つまり原罪説ですね。けれどもロシア正教は人間は良きものとして神に創られたということを信仰しているわけです。人間は罪びとではない、これは日本と同じです。日本も性善説で、しょっちゅう裏切られていますけれど。ですけども、ロシア人とは人間観が合うのです。

3番目に、日本人もロシア人も集団主義なのです。ロシア人は個人主義じゃないのです。これはロシアと中国の関係をご覧になるときに注意すべき点です。中国の方は徹底した個人主義ですから。悪く言えば利己主義なのですが。だから中国人はロシア人とは合わないのです。ロシア人の集団主義は、例えば、ソチオリンピックの際にもものすごく盛り上がったんですね。あのときにロシアはフィギュアスケートでいえば団体戦で金メダルを取ったのですが、ああいう集団行動がロシア人も得意なのです。日本と似ているのです。だからロシア人は家族を大切にします。

この集団意識をロシア語ではソボルノスティと言うのです。一つの集団に帰属することによって安心感が得られる。簡単に言えば、そういう発想です。でもソボルノスティが持つ本当の意味は恐らくロシア人にしか分からないでしょう。例えば、あの暴君スターリンにも結局ロシア人は従ったのですよ。スターリンのような独裁的指導者と一体化することによって、自分というものの存在に安定感を覚えるといいますか、スターリンと自らを一体化することによって生きる

というか。そういう気持ちがあはロシア人にあるわけだ。それを悪く言う人は、プーチンは独裁者だとか、ロシアは民主主義国家ではないといひますけれど。それはちょっと酷な言い方であって、この集団性のことを理解する必要があるのだ。ロシアは欧米の言うような民主主義国家にはなり得ない。それはこの集団性が個人主義に優越しているからだ。欧米の場合は個人主義ですから。個人と個人の契約。個人と国家の契約なのだ。

ところがそういう発想が日本にはもちろんありませんし、ロシアにもないのだ。ロシアという国家の指導者と一体化するというのが、ロシア人の平均的な発想なのだ。ところが、そうじゃない発想をする人がロシアの中には住んでいるのだ。それはユダヤ系の人なのだ。これはユダヤ系の人が悪いとかそうじゃなくて、ロシア人とは全く発想が違ふのだ。ユダヤ人はまず大地への執着がないですね。ユダヤの人は、ディアスポラといひますが、世界に離散して住んでいるわけだ。それから性善説でないと云ったら悪いですけど、非ユダヤ人に対しては性悪説を取っています。

それから集団主義ではないのだですね。ユダヤ社会という一つの塊はあっても、みんなすごく個人主義的だ。だからそういうユダヤ人が百万人ほどロシアに住んでいるわけだ。実はそれが今のプーチン大統領が直面している最大の国内問題なのだ。

3月18日に大統領選挙がありますが、反プーチンデモがまた起こるでしょう。反プーチンデモをやっている人の多くはロシア人ではなくユダヤ系だ。日本にもロシアから来た学生や学者がいますが、プーチンは独裁者だとか、ロシア社会は民主化されていない、大体そういうことをおっしゃるのはユダヤ系の人だ。ユダヤ系の人が悪いというわけじゃないですよ。でも彼らの発想とロシア人の発想は違ふのだ。これが分からないとロシア革命が分からないんです。

ロシア革命というロシア人がニコライ2世の圧制に抗議して決起した革命だと思ひているでしょう。違ふのだですよ。これはメディアも学者も言わない。だからその本当の歴史をこれから解き明かそうというのが、歴史修正主義ということになるのだですよ。彼らは私も含めてロシア革命の真相の話をすると、歴史修正主義者だと批判するわけですよ。それは彼らが何かを隠している。だからそういう彼らが隠してきた歴史を暴くような動きに対しては歴史修正主義者というレッテルを貼るわけだ。

しかし、このようなレッテル貼りは、常識的に考えれば議論することを妨害することですね。あなたの言っていることは陰謀論だとか、反ユダヤ主義だとか、要するに歴史修正主義だとレッテルを貼って、正面から議論しない。ということは議論できないのだ。なぜなら、議論をすれば彼らのうそが分かるからだ。私はあえて言ひますが、彼らが今まで歴史で隠してきたことが白日の下に晒されるのだ。だから私が訴えたいのは、誰が悪いとか誰がどうだと言う前に、歴史の真実を、歴史が教える日露関係の真実に迫って、その上で判断すべきだ。一方的な情報しかもらっていないと、客観的に判断のしようがないわけだ。ですから違ふ方向からも情報を皆さんに学んでいただいて、その上で判断していただければいいんです。

さて、現在の世界はどういう枠組みかということですが、いまだにロシアを支配する戦いなのです、これは。それは1917年のロシア革命以来ずっと続いているのです。そうするとまだロシア革命が続いていると言うとみんなびっくりされますが、続いているのです。ソ連は崩壊したじゃないかと多くの方はおっしゃるのですが、現在はグローバリズムでロシアを支配しようとしているのです。それが21世紀のロシアを巡る戦いなのです。

ロシア支配を巡る戦いは200年も続いているのです。マッキンダーは20世紀初頭の人ですが、それよりも100年前からこのロシア支配を巡る戦いは行われてきたのです。それを踏まえて、マッキンダーはこういう法則を残すことができたのだと思います。ウィーン会議、会議が踊るとわれわれは学校の教室で学びましたね。しかしどういう会議だったかについては学ばないんです。ただ会議は踊ってばかりいた、というふうにわれわれは教えられて、歴史の真実から遠ざけられているのです。

ウィーン会議の本質的な問題は何かというと、ロシア対ロスチャイルド家の戦いだったのですね。ウィーン会議というのはナポレオン戦争の後始末ですが、ナポレオン戦争で大もうけして、ヨーロッパの事実上の支配者になった人物がいたのです。ロンドンにいたネイサン・ロスチャイルドがその人です。機を見るに敏というか、ものすごい金儲けの才能の持ち主だったと私は思います。

どういう才能だったか。皆さんもワーテルローの戦いをご存じですね。ナポレオン戦争の最後の決戦。イギリスのウェリントン将軍とナポレオン軍との戦いでした。ワーテルローというのは私の勤務したベルギーの首都ブリュッセルのすぐ南にあるのです。このナポレオン戦争を戦うために、イギリスは巨額の戦時公債を発行し、投資家が公債を購入していました。ネイサン・ロスチャイルドもたくさんイギリスの戦時公債を買っていましたから、ナポレオンが勝つかイギリスのウェリントン将軍が勝つかというのは、彼にとっては倒産するかどうかの節目だったのです。彼はいろんな手を尽くして、世界の誰よりもその結果を早く知ろうと努めました。ワーテルローというのはベルギーの田舎ですから、周りに何もありません。そこで、伝書鳩を飛ばしたり、早馬を走らせたり、狼煙を使ったとかいう説もありますけども、とにかくネイサン・ロスチャイルドがウェリントン将軍が勝ったという情報を最初に手に入れたわけです。

ところが問題はここから先の彼の行動です。彼はその情報を得るや、ロンドンの証券取引所に行ってイギリスの戦時公債を売り始めたんです。沈痛な面持ちで、自分は大損したと言わんばかりに売り始めた。そうすると周りの投資家があのロスチャイルドが公債を売るんだったらイギリスが負けたと思って投げ売りを始めたのです。その結果イギリス公債の価格が紙くず同然になった。そのときにネイサンは暴落した公債を全部買い占めたのです。そこへウェリントンが勝ったという情報が齎された。そうするとイギリス公債の価格が急騰したのです。それでロスチャイルドはヨーロッパの大富豪になったといわれているわけです。その成果を踏まえて、ウィーン会議は行われたのです。

ところが、そういうことは学校では教えないのです。金融の仕組みのことは教えない。なぜかという、金融の仕組みが分かると、つまりその金融を操っている人の、いわば種明かしが分かってしまうのです。だから皆さんも金融のことはご存じないはず。日本の経済学者も知らないでしょう。私も学校で金融論なんて勉強しましたが、何の役にも立ちません。景気循環論なんて何の役にも立ちません。景気は意図的に上下させられるのです。金融を握っている勢力によってです。金融を握るといえるのはどういうことかという、お金、つまり通貨の発行権を持っているということです。

皆さん、誰が通貨を発行していると思いますか。アメリカのドルを発行しているのは、民間人なのです。政府じゃないのです。これが私たちから隠されているのです。つまり通貨を発行しているのは、政府じゃなくて民間人の銀行家なのです。アメリカの中央銀行であるFRBの真実を誰も教えてくれない。NHKのテレビをご覧になったってそうじゃないですか。アメリカの中央銀行に当たるFRBとしか言わない。100パーセント民間銀行の中央銀行たるFRBとはNHKも朝日新聞も口が裂けても言えないのです。それ言ったらつぶされるから。でもこれは事実なのです。

だから、歴史学者、政治学者は金融の話は知らないから歴史が分からない、政治が分からない。なぜロシア支配を巡る200年の戦いが行われているかということは、正統派の学者は誰も言わない、知らない。知ろうともしないわけです。アメリカのFRB、フェデラルリザーブボード、あるいはフェデラルリザーブバンクのことですが、FRBができたのは1913年です。1913年のときの大統領はウィルソン大統領ですよ。お分かりですね、皆さん。先ほどウィルソン大統領の話をしましたね。バーネイズが側近でいて、事実上、自分たちがアメリカの本当の支配者だと言っているのです。彼らはメディアを握っている人なのですが、実はアメリカの金融を握っている人がメディアも握っているのです。それを知られると世界の仕組みが分かってしまう。民間人が実はお札を刷っていると言う秘密が分かってしまうのですよ。

わが日本銀行もそうですよ。わが日本銀行も民間銀行ですからね。日本銀行のホームページをご覧になったらいい。何て書いてあるか。日本銀行は政府機関ではありませんと書いてある。でも、これ誰も問題にしないのですよ。黒田総裁がどうだこうだって議論していても、日銀が民間銀行だということを議論しないと意味がないのです。今度G20首脳会議が大阪で行われる予定ですが、福岡で財務大臣・中央銀行総裁会議が行われます。皆さんおかしいと思いませんか。財務大臣がやればいいのですよ。何で財務大臣プラス中央銀行総裁が入るのか。こういうところにピピッと勸を働かせれば、財務大臣と中央銀行総裁というのは全く指揮命令系統が別なのだっていうことが分かるわけです。

もし中央銀行が財務省の指揮下になれば、中央銀行総裁を加える必要はないわけです。世界各国もみんな通貨を発行する中央銀行が政府の支配下になれば、こんな会議をやる必要はないのです。これ一つだけでも知っておられると世界を見る目が違いますよ。だって中央銀行総裁ってい

うのは民間人なのですから。政府の人間じゃないのです。事実上世界は全部そうになっているのです。

要するに、それはなぜ重要かと言いますと、ロシアを見るときに分かるわけです。この200年の戦いが開始されたウーン会議は、ロシアのアレクサンドル1世とイギリスの金融資本家ネイサン・ロスチャイルドとの事実上の戦いだったという話をしましたね。つまりアレクサンドル1世はキリスト教の君主による神聖同盟を提唱して、キリスト教徒で団結しようと訴えたのです。ネイサン・ロスチャイルドが面白くないのは当然ですね、彼はユダヤ教徒ですから。

しかしそれだけではなくて、アレクサンドル1世がどうしても同意しなかったことがある。それは民間の中央銀行を造ることなのです。このときイギリスにはもう民間の中央銀行たるイングランド銀行というのがあったのです、フランスにも民間の中央銀行があった。しかしロシアはそれを拒否したのです。だからその後、ずっとロシアに対する国際金融資本家の攻撃が続くわけです。それでロシアの名君といわれたアレクサンドル2世もあくまで民間中央銀行を認めなかったこともあり、ユダヤ系の革命家に暗殺されるのですよ、1881年に。

そこで、日露戦争の話に移りますと、この日露戦争時にアメリカのユダヤ系の金融資本家ヤコブ・シフが日本の戦時公債を買ってくれたということは、学校で教えてくれるのですね。要するにどういうことかというのと、戦争するには金が要るのです。そうすると戦争するために外国から借金をして戦争をするわけです。そうするとどうなるかというのと、戦争をするための金を貸す人はもうかるのですね。戦争するには金が要るってことは皆さん覚えておいてください。多くの国は戦争する場合にはお金を借りるのです。アメリカもそうです。南北戦争は奴隷解放のための戦争だと習いましたが、全然うそなのですよ。

この間たまたまアメリカのメディアにこういう調査結果が出ていました。アメリカで一番、評価の高い大統領は誰かということですね。これで一番評価が高いのは南北戦争のときの北部の大統領だったリンカーンなのです。2番目が初代ワシントン大統領。3番目がフランクリン・ルーズベルトですよ。日本に戦争を仕掛けてきた。最下位がトランプだというわけですね。これはもうトランプを陥れるためのフェイクニュースだと私は思いますけれど。

それはともかく、いまだに一番アメリカで評価が高いのが実はリンカーンなのです。しかしなぜリンカーンの評価が高いというか、このときリンカーンを助けたのは誰かというのとロシアなのです。これは歴史の授業では教えない。ロシアのアレクサンドル2世がリンカーンを支援した。ニューヨークとサンフランシスコにロシア艦隊を派遣したのです。実際には戦闘には従事しませんでした、北軍の勝利に大きな役割を果たしたのです。

このように、アメリカが今日、分裂しないで統一を保っているのはロシアのおかげなのです。だってイギリスはアメリカを分裂させるために南北戦争を起こしたわけですからね。アメリカがイギリスを経済で追い越す勢いにあった。そこで、イギリスはアメリカを分裂させようと画策したわけです。南部に対して工業化した北部に搾取されているから、アメリカ連邦から脱退しろと

騒いだのです。これを受けて、南部諸州が脱退したのが南北戦争の始まりです。だから奴隷制度じゃないのですね。世界を味方に付けるためにリンカーンが奴隷解放を宣言したという事情はあっても、奴隷解放のために南部と北部が戦争したわけではないのですね。

もっとも重要なことは、北部のリンカーンを支援したのはロシアのアレクサンドル2世。南部を支援したのはイギリス。フランスもそうですが、はっきり言えばロンドンのシティーなのです。彼らは戦争するときに南部にお金を貸したのです。南部はイギリスからお金を借りて戦争をした。2、30パーセントの利子ですよ。ロンドンのシティーは同じように北部にも金を貸そうとしたのです。しかし、リンカーンはそれを拒否した。リンカーンは政府紙幣を発行して戦費を賄ったのです。その政府紙幣の裏がグリーンだったから、いまだにドルはグリーンバックといわれているのです。

そうしたらイギリスのロンドンタイムスがかみついて、アメリカの北部では政府がお金を発行している。これは大変なことになる。なぜなら、アメリカ政府はいずれ借金がなくなってしまう、世界の富はみんなアメリカに集まる。そういう政府は打倒しなければならないと言明しているのです。お分かりですね、南北戦争が終わったときにリンカーンは暗殺されたんです。リンカーン暗殺の理由なんて学校の教科書は教えないですよ。それは政府紙幣を発行したから。誰の利益に反したか。ロスチャイルドなどの国際金融家、世界に金を貸している人たちですよ。銀行が世界に金を貸してもうけるというのは、一つのビジネスとして私は否定はしません。しかし、国際金融家の仕事として戦争のために高利で金を貸すという裏面があるということ、われわれは知っていなければならない。

もう一人アメリカで政府紙幣を発行して暗殺された大統領がいましたね。ケネディ大統領なのです。ケネディ大統領も大統領行政命令でドルを発行したのです。ケネディ暗殺の真相というのはまだ明らかになっていませんが、これが明らかになるときは世界の枠組みが変わる時だと思います。経済の専門家の99パーセントは反対するんですが、政府が通貨を発行すればいいのですよ。政府は予算が赤字になったら借金する。日本の場合は国債を発給する。ところがありがたいことに、日本の場合はほとんど日本人が買っていますから、だからギリシャのようにはない。ところが世界にはそれが面白くないって人がたくさんいるのですよ。だから日本経済を支えているのは皆さまがたです。皆さまがたが国債を買ってくださるおかげで日本経済は外資に乗っ取られないのです。ギリシャみたいに外国の投資家がギリシャの国債を買うといつでも乗っ取られるのですね。

つまりアメリカが今日、統一国家であるのは実はロシアのおかげなのです。トランプは知っているのですよ。トランプ大統領は大統領選さなかにロシアとアメリカの200年以上にわたる友好関係という話をしているのです。それで南北戦争の原因は奴隷解放じゃないと言ったら、一斉にアメリカのメディアが反発するのです。トランプは歴史を知らない。そうではない、トランプは歴史を知っているのです。トランプは真実を言っているから、アメリカのメディアがトランプ

を中傷するわけです。われわれは誤解しているのですよ。アメリカは自由民主主義国で世界の秩序を守っている国。それに対してロシアと中国は秩序を変更する勢力だとメディアは報じています。中国はそうなのですけど、ロシアは違うのです。

というか、もっと言えばトランプ大統領が出現するまではアメリカこそ世界の変革勢力だったのです。それはロシア革命を支援したのはアメリカだったのです。こんなことは学校の先生は一言も教えてくれない。不思議ですね。世界の歴史は。ロシア革命に資金支援したのは英米のユダヤ系金融資本家です。それではなぜユダヤ系かというと、当時帝政ロシア国内にいたユダヤ系の住民が弾圧されていたからというのがその理由なのです。

ところが調べてみると、1917年の11月のボルシェビッキ革命の指導者の大半はユダヤ革命家なのです。革命の有力者のトロツキーは皆さんご存じですね。トロツキーの信奉者はトロキスト。現在のトロキストはネオコンと称する人たちですがね。そのトロツキーはウィルソン大統領のアメリカに亡命して、アメリカで生活していたのです。その面倒を見ていたのがヤコブ・シフなんです。そのトロツキーはウィルソン大統領からアメリカのパスポートをもらってロシアへ帰国したのです。これも事実ですから。ちなみにレーニンはスイスに亡命していて、ドイツの封印列車でロシアに帰ったのです。

そうするとロシア革命とは何だったかということが分かりますね。これは日本との関係から言えば、その後シベリア出兵というのがありました。ところがアメリカはソ連の共産主義政権を支援するために出兵したのです。日本は共産主義政権が極東に拡大するのを防ぐために出兵したのです。だからアメリカの思惑と日本の思惑は180度違っていただけです。

ところがシベリア出兵について、日本の歴史教科書は日本の悪口ばかり言っているわけです。日本は領土的野心があったとか、そんなことじゃないのです。調べてみたら、日本は連合国から頼まれた。当時は第1次世界大戦中でしたから。連合国の特にイギリスとフランスから、ぜひシベリアに出兵してくれと。ところが日本は慎重で、これは連合国全体が一致しないといけないからアメリカが賛成してくれたら日本も渋々という意味だと思いますけど、行きますということを伝えていたのです。最終的にアメリカも出兵することになったから、日本も重い腰を上げたんですが、そのアメリカは何のことはない。ソ連を支援するために行った。こういうことは本当に歴史では教えられない。日本はびっくりしたのです、行ったら、アメリカは何にも日本に協力しない。それどころか日本の邪魔をするわけですから。

連合国のシベリア出兵は、シベリアでソ連軍に包囲されていたチェコ軍救済が目的でした。チェコ軍はもともとオーストリア・ハンガリー帝国の下にあったのですが、オーストリア・ハンガリー帝国に反旗を翻して連合国に寝返ったわけです。そのチェコ軍を救うというのが名目だった。ところが、それがいつの間にかアメリカはソ連軍を支援する立場になっていた。これが当時のアメリカの正体です。これが分かれば何でルーズベルト大統領が日本に戦争を仕掛けたかが分かるのです。

私は『アメリカの社会主義者が日米戦争を仕組んだ』という本を書きましたけれど、これは皆さんが学校で習われた日米戦争の歴史とは全く違います。日本が真珠湾攻撃をしたことは事実としてはそうなのですが、同時にルーズベルト大統領がどれだけ日本を追い詰めたかということも検証しないと公平な見方にはならないわけです。日本の軍国主義うんぬんというのは、彼らの宣伝ですから。もちろん私は当時の日本の政治が大変混乱していた、日本が国家の意思としてどのようにアメリカの挑発に対応するかということで手ばかりがあったと思います。だから日本も絶対に何も悪いことがなかったとは言えません。

しかし、アメリカはどうしても日本に第1撃を打たせたかったのです。そうしたらアメリカは晴れて日本と戦争できた。アメリカが日本と戦争しなきゃならない理由は、中国を共産化することだったのです。結果的にそうになりましたね。これは中華人民共和国がどうしてできたかを調べたら分かることなのです。あのときアメリカのジョージ・マーシャル将軍、マーシャルプランで有名ですが、彼が戦後の国共内戦の最中に大統領特使として中国に派遣され、内戦に勝ちかけていた蒋介石に対して、停戦をしろ、そして国民党政府に共産主義者を入れろと言いつつ渡したのです。これをやらないとアメリカは蒋介石を支援しないと引導を渡した。この間の事情については、歴史の資料が残っています。だから、中華人民共和国はアメリカが作ったのです。それは共産主義国ソ連をアメリカがつくったのと同じなんです。

このような視点から見ると、私たちが学んだ歴史は全くひっくり返る。ルーズベルトの取り巻きは社会主義者だったのですよ、皆さん。ちなみに、ウイルソン大統領の側近であったマンデル・ハウス大佐は、社会主義の世界という近未来小説書いているのですよ。ハウス大佐は、もちろんロスチャイルド家のアメリカにおける代理人です。

つまりこういうことです。これは偏見なしに申し上げれば、ユダヤ思想というのは社会主義思想なのです。ユダヤ思想と社会主義が結び付く共通項は国際主義なのです。簡単に言えば国の主権を認めないということです。社会主義国が拡大していけば、世界は社会主義の下に統一される。共産主義で統一されるということです。要するに国の主権がなくなるということです。それは、自らの国を持たずに世界に離散して住んでいるユダヤ人にとって彼らの生存を保証する戦略であるということは、何の不思議もない。彼ら自身が生き残るための世界観ですから。それをわれわれが理解することが重要です。そういう世界観があるということを理解して、それとどう対応するかということが重要なのです。

最後に北方領土問題に触れます。これは一言で言えば安倍総理とプーチン大統領の間でしか解決できないと私は思っております。その理由を簡単に申し上げれば、プーチン大統領が何をやりたか理解する必要があるということです。プーチンは「ロシアの新しい理念」を唱えています。これが重要なのです。「ロシアの新しい理念」は人道主義に基づく世界の普遍的価値と、20世紀の混乱も含めて、これはロシア革命のことですが、時の試練に耐えたロシアの伝統的価値を有機的に統一するときに実現すると言っているのです。それでプーチンは日本の文化、哲学に学

びたいと言うのです。もうお分かりですね。日本がプーチンのいう「ロシアの新しい理念」の精神を既に明治維新のときに実現しているのです。日本は当時の欧米普遍主義を取り入れ、日本の伝統とうまく共存させて今日の経済発展を築いたわけです。

これこそプーチン大統領が日本に注目する最大の理由なのです。柔道ではないのです。柔道が好きだからプーチンさんは親日家ではない。プーチンはこの日本の明治維新以降の日本の経済発展をロシアのモデルにしたいと思っているわけです。それによってロシアをハイテク産業化した。今のロシアは資源輸出依存国ですから。寒いサウジアラビアみたいな国です。要するに石油と天然ガスを売って経済を成り立たせている。それじゃ駄目なのです。プーチンはロシア経済を近代産業化したのです。

しかし、どういうふう近代産業化するかと言うと、欧米の外資を入れたのでは駄目だ。かつて彼らはエリツィン大統領時代にロシアの資源を奪おうとしたのです。結局民営化というのはそういうことですね。民営化で新興財閥ができた。七つ財閥ができましたが、そのうちの六つはユダヤ系の財閥だったのですよ。彼らがエリツィンを支えていた。そういうやり方はおかしいということで、プーチン大統領がビジネスはやってもいいけれど政治に口出すなということでそれに従わなかった新興財閥を一つ一つつぶしていったのです。そういうのが東西冷戦後のロシアの歴史なのです。

プーチン大統領がやろうとしていることは、ピョートル大帝以来のロシアの課題を解決したいということでしょう。ピョートル大帝はヨーロッパ的なサンクトペテルブルクを建設してロシアの欧化を図りましたが、それだけではロシアは発展しなかった。ではスラブ主義でやったら発展したかと言うと、これも発展しなかった。だからプーチンがまさに「新しいロシアの理念」で、そういう欧米の普遍的価値とロシアの伝統的価値を有機的に統合して、ロシアの発展を目指すと言っていることは正しいことなのです。これが世界の、ロシアだけではなくてほとんどの国にとって必要なことなのですね。欧米以外の国にとって必要なのですよ。欧米以外の全部の国が悩んでいるのがこの問題です。今は、グローバリズムと言ってもいいですが、それと伝統的価値をどう結び付けて、国の自立、発展を図っていくのか。その先頭に立ったのがプーチン大統領なのです。プーチン大統領はロシアの発展のために日本の経験に学びたいと言っている。これが北方領土問題の解決の鍵なのです。

私もし安倍総理なら、プーチン大統領にこう申し上げますね。プーチンさん、私はあなたをロシア史上最高の英雄にしてあげられる。つまり、ロシア型の近代産業国家、ハイテク国家の設立のために日本は官民挙げて全面的に支援します。しかしそのためには北方領土を返還してもらわなければなりません。そうでないと国民が納得しません。プーチンさん、どちらを選択しますか。あなたは北方四島にしがみつくのか、それともロシアを近代的なハイテク産業国家にして、ロシア国家の安全保障を強化する。どちらを選びますか。プーチンに選ばせたらいいのですよ。日本は選ばなくてもいい。プーチンがどうしても北方領土を返せないと叫びました、

あなたはいつまでも寒いサウジアラビア国家でいらっしゃるわけですね、残念ですが。これは半分、冗談ですが。私はプーチンさんと安倍さんはもう、その辺は通じていると思います。それが安倍総理の8項目の提案です。

しかし日本のメディアにかかれば、8項目の提案というのは領土と経済の取引だと言うのです。違うのです。安全保障問題なのです。ロシアの安全保障を強化することにつながらなければ、北方領土問題の解決にプーチンがOKするはずがありません。いくら道徳的な配慮や、千島樺太交換条約があるとか、いくら言ってもプーチンは動きません。さっき申し上げたように、プーチンをロシアの近代化を成し遂げた史上最強の英雄にしてあげるとの伝家の宝刀を抜くことです。言い方はもうちょっと洗練しなくてははいけませんよ。それこそ2人で酒飲みながら。それしかないですね。もしこの取引が成立しなければ、北方領土問題の解決は永遠にありません。

これはロシアが悪いからとか日本に軍事力がないからではないのです。ロシアが一番やりたいことを日本が提供するということです。北方四島を日本に返したほうがロシアにとって得になると、プーチンが納得しなくてはならない。安倍さんの説得力によってプーチンは納得するはずで

す。

最後に一言だけ申し上げますが、今、世界が直面している最大の課題はグローバリズムです。これはいろんな形で申し上げましたが、グローバル市場で世界を統一しようという動きです。それに対して、国の伝統を大切にしようといういわばナショナリズムを重視する勢力が対峙しているのが世界の現状です。この解決策はどちらかを選ぶことではなく、両者をうまく架橋することなのです。グローバリズムとナショナリズムのバランスを取る。これしか解決の方法はないわけです。今後とも世界のグローバル化というか、グローバルな交流はますます深まります。しかし同時にわれわれが日本国家として、主権国家としての矜持を持って文化を大切に、伝統を大切にするという、そういう姿勢も同時に必要なのですね。

このような世界観を提示しているのが、実はトランプ大統領なのです。トランプ大統領については、日本のメディアはアメリカファーストしか伝えない。しかし、彼はいつもその後で各国ファーストでやりなさい、アメリカはアメリカファーストでやる、しかし各国も各国ファーストでやるべきだ。そして主権国家同士として世界で仲良くしましようというのがトランプさんの言いたいことです。しかし、メディアはアメリカファースト以外全部切ってしまうのです。だからトランプは孤立主義者だ、大衆迎合主義者だと。大衆迎合主義というのは本当にわれわれをばかにした話ですね。メディアは大衆をばかにしてはいけないというポリティカル・コレクトネスを言いながら、自らが大衆をばかにしているわけですからね。そういうメディアの欺瞞にも気付いていただければと思います。

しかし次元を変えれば、世界を救うカギは日本の伝統的な八紘一宇の精神にあるといえますね。各国が独自性を発揮しながら世界という屋根の下で共存する、そういう八紘一宇の精神が実はグローバリズムとナショナリズムをうまく架橋できるのではないかと。それができるかどうかは、皆

さん方一人一人の生活態度にかかっていると申し上げて、きょうの話は終わりたいと思います。

司会：馬淵先生、本当にありがとうございました。

卓越した内容でございました。皆さまの気付きが今後を変えるとよく分かったと思います。皆さまから頂きました質問用紙を今から見ていただきまして、時間の許す限りお答えいただくことになるかと思えます。ちょっとお疲れのところと存じますが。

馬淵：北方領土問題についていろいろな質問を頂きました。プーチンは北方領土を返すと思えますかと。これ言いましたね。プーチンにロシアを本当の意味で近代産業国家にしたいという思いが強ければ返すと思えます。

ロシアが返すはずがないと言うご意見もありましたが、たとえ99パーセント返すはずがないとしても、その残りの1パーセントを追求するというのが外交であるわけですね。3月18日にプーチンが再選される予定ですがその後、日露関係は必ず進んでいくと思えます。と同時に米露関係も進むのです。今、米露は対立しているように見えますが、先ほど申し上げましたようにトランプの足を引っ張っている勢力はネオコンですね。トランプさんがもし引きずり下ろされたら、世界は戦争になる可能性が残念ながらあります。

質問者の方の懸念、北方領土にアメリカの軍事基地ができるのではということですが、それは違うのです。北方領土にロシアの基地を認めればいいのです。こういう発想を今の外務省はするべきです。だって沖縄にアメリカの基地があるのだから、北方領土にロシアの基地を置いても構わないじゃないですか。そしたら日本はアメリカとロシアから守ってもらえる。これは半ば冗談に聞こえるかもしれませんが、日本の最大の安全保障になりますからね。

同じような質問がありました。北方領土におけるロシアの基地化の動きがロシア領土の拡張に見えてなりませんということです、これは日本に対するシグナルですね。早く交渉をやりましょうということです。具体的には歯舞、色丹はすぐ返ってくるでしょう。それで国後、択捉は例えば20年とか30年間、日本の主権下にあるけれどもロシアが行政権を行使するという沖縄方式ですね。それしかないと思えます。それで、最後の最後の譲歩としては、国後島と択捉島間の海峡がロシアの原潜の通り道ですから、ここにロシアの軍隊の駐留を一時的に認めることにすれば、解決は決して不可能ではないと思えます。そういう腹をくくった取引ができるかどうかということだと思います。

それからトランプ大統領の選出についてのいろんな質問がありました。ロシア疑惑。これは昔ニクソン大統領を辞任させたウォーターゲート疑惑と同じです。トランプの引きずり降ろしを狙っている謀略です。ウォーターゲート事件は、ニクソン大統領が悪いことをしたから辞任させられたと思われていますが、違うんですよ。政権内部の高官がわざといろんな微妙な情報をワシントンポストにリークした。誰がリークしたのは、この間亡くなられたけれども、FBIの副長官で

す。FBIのナンバー2の高官がリークしていたのです。現職のFBI副長官がリークすること自体が国家犯罪のはずですけどね。そういうことをメディアは言いませんね。メディアが組んでニクソンを引きずり下ろした。ニクソンがなぜ引きずり下ろされたかという理由は、私のこの『国難の正体』の中に書いてあるのですが、イギリスに引きずり下ろされたということを、ニクソンはほのめかしてるのですよ。

それはこういうことなのです。ニクソンが記した『指導者とは』という本のなかで、ニクソンはイギリスの外交官のほうがアメリカの外交官よりも優秀だって書いている。イギリスの影響力の強い国ではとの但し書きはありますが、なんでこんなこと彼は書くのだろうと思ったんですが、その後にニクソンはこう続けている。アメリカ大統領といえども、ヨーロッパ首脳の見解はよく聞かなければならない。事後通告では駄目だ。事前に十分、意見を聞かなければいけない。アメリカ大統領といえども万能ではないと書いているのです。何でこんなこと書いたのだろうと疑問を持つことが歴史を読み解くことに繋がるのです。

つまりもう皆さんお分かりですね。ニクソンはイギリスにやられたと言っているのですよ。イギリスの外交官のほうがアメリカの外交官よりも優秀だと書いた後で、ヨーロッパの首脳の見解を聞くべきだと続けていますが、これは要するにイギリスの首脳の意に沿わないことをやったからと読めるわけです。イギリスの首脳とは誰ですか。もうウィーン会議以来ずっと一致しているのですが、ロンドンシティーにいる人に引きずり下ろされたと言ったニクソンは言いたかったのです。ケネディもその人たちに殺されたということですね。

だからロシア疑惑というのはトランプを引きずり下ろすための一種の「モリ・カケ」騒動のようなものですね。疑惑なんて言われたって、それは何でも疑惑になりますよ。だって大統領選挙戦の最中にロシア人と接触したと非難していますが、そんなことは当たり前なのです。安倍さんだってまだ就任前のトランプと会談していますからね。それから安倍さんは選挙に負けたヒラリーとも選挙戦中に会談していますよ。ロシアゲートで批判されていることは、大統領に正式に就任するまでは外国人と接触してはいけないと言うことです。つまり彼らが今トランプ攻撃のために使っている口実は、民間人の立場でありながら外国要人と接触したということでしょう。ヒラリーだって民間人だったじゃないですか。トランプだって当選してもまだ就任式前は民間人ですからね。ロシアは反トランプの口実に使われているのです。

ネオコンの話をしてきましたが、ネオコンというのはロシアのトロキストですね。その流れをくむ人たちがプーチンを引きずり下ろそうとしているわけです。その人たちがアメリカの大統領を今まで操ってきたわけですね。ちなみに皆さんのご存じのジャーナリストでウォルター・リップマンという人がいますね。実は彼はバーネイズと一緒にウィルソン大統領の下で、ドイツと戦争するための宣伝工作に従事していたのです。そのウォルター・リップマンについてイスラエルで発行されている『ユダヤ人名事典』にこう書いてあるのです。

ウォルター・リップマンは当初は、というのはウィルソン大統領の側近だった頃ですが、社会

主義者だったと書いてあるのですよ。その後、リベラルになったとされていますが、恐らく第2次世界大戦の前後でしょうね。そして、最後はネオコンになったと書いてあるのです。1960年の半ば頃に彼は亡くなっていますから、1960年頃にはウォルター・リップマンはネオコンだった、トロキストだった。それだけだったらウォルター・リップマンは左から右に移った人かと思うのです。ところがその略歴では、ウォルター・リップマンは終生国際主義者だったと書いてあるのです。お分かりですね。共通項は社会主義もリベラルもネオコンも国際主義なのです。国際主義とは国境を廃止するというイデオロギーです。

これは何もウォルター・リップマンだけではありません。皆さんもご存じのアメリカの大富豪のデイヴィッド・ロックフェラーも国際主義者です。彼の回顧録を読むと、自分は国際主義者だと言明しているのです。彼はフロンティアスピリットを体現しているなんて一言も言ってない。自分は国際主義者で、世界の仲間たちと一緒に一つの世界を構築するために仕事をしてきたと言っているのですよ。つまり、ロックフェラーは世界を統一するために世界の仲間と協力してきたが、アメリカ人と一緒にやってきたとは言っていないのです。まさに国際主義者の面目躍如といったとろろです。

われわれはデイヴィッド・ロックフェラーがアメリカの大富豪だということしか知らない。ロックフェラー家というのは、共産主義国ソ連を支援した大富豪の一人です。グロムイコ外相の回顧録を読んでみると、彼の親しかったアメリカ人の話がどんどん出てくる。そのうちのトップバッターがデビット・ロックフェラーの兄のネルソン・ロックフェラーですよ。これが米ソ関係の隠れた一面です。

次は、ルーズベルトの側近に共産主義者がいたとのことですが、トルーマン大統領に変わってそれまでの共産主義者はどうなったか、排除されたのですかという質問と、プーチンは政敵を殺していますが、殺されたのはユダヤ系ロシア人ですかとの質問です。前半ですが、トルーマンの側近はそのまま残りました。トルーマンさんは真面目な人だったかもしれませんが、特別に国際情勢を勉強した人ではありません。突然ルーズベルトが亡くなって大統領に昇格した人ですから、ルーズベルトの側近が引き続き占めたということですね。だからトルーマンのときに中国共産主義政権ができるわけですが、これを作ったのはトルーマン大統領ということになります。

もう一つ、朝鮮戦争もトルーマンのときにやりました。当時の北朝鮮の金日成に韓国に侵攻してもいいと言ったのはアメリカですからね、当時のアチソン国務長官ですよ。1950年1月にアチソン国務長官が韓国はアメリカの防衛戦に含めないと言ったのです。それを聞いて6カ月後に金日成が韓国に侵攻したわけです。アメリカがえさをまいたのです。しかし、それに対してアメリカが国連軍をつくって反撃するんですが、そこに中共が参戦してきたのです。それに対して驚いたことに、アメリカはわざと負けたのです。朝鮮戦争の顛末は『国難の正体』に出ていますから、読んでください。これを読めば東西冷戦は何であったかというのが分かります。

結論だけ申し上げますが、東西冷戦は八百長です。この本を読んでもいただければ八百長の意味

が分かる。つまりアメリカは朝鮮戦争で勝たなかった。わざと負けた。ベトナム戦争でもわざと負けた。東西冷戦の真相はそういうものです。ケネディは東西冷戦体制を仕組んだ勢力の言いなりにはならなかった。だから殺された。キューバ危機の際、ケネディは本気でアメリカの力を使った。本当にソ連と正面から対決した。そしたらソ連のほろが出てしまった。つまり、当時のソ連は到底アメリカに対抗できる軍事力がないことが分かってしまった。東西冷戦を操っていた勢力にとっては許しがたいことでした。だからその後ケネディは暗殺されました。もっとも、暗殺の直接の理由は政府通貨を発行したことです。

もう一つの理由はベトナム戦争に介入するため。ケネディ大統領はベトナム戦争を終結させようとしていたのです。ケネディの後のジョンソン大統領の時に、アメリカは本格的にベトナム戦争に突入して、泥沼に巻き込まれました。

プーチンは政敵を殺していますがとの質問は、半分近くはフェイクニュースに近いと思います。誰がそのニュースを流すかです。必ず西側の通信社ですから、ロイターとか AP とか。それは少し割り引いて考えたらいいと。それからロシアは先ほど申し上げましたように、日本のような民主主義国ではないのです。しかし、どちらがより国情にあっているかという点、民主主義国のほうが優れているとは言えないのですね。ロシアという日本の45倍の国土のある、その国をまとめるためには強権的な政治が必要なのです。アメリカはメディアを握っている勢力がアメリカ人を洗脳しながら治めているというわけですから、ロシアもアメリカも五十歩百歩ではないでしょうか。

国際理解サロン

